

環境特集



地

球という惑星が生まれてからおよそ46億年。太陽の寿命があと50億年と言われていることから、この惑星の寿命は長くても96年ということになる。その地球上に最初の人類とされる猿人が登場するのはおよそ600万年前、それに続く原人は180万年前、そして我々現生人類に属する新人と呼ばれるヒトが登場したのはおよそ10万年前とされている。ちなみに仮に46億才の地球の年齢を1時間(60分)に置き

換えてみると、ヒトが地球上に登場してからまだ僅か2秒しか経っていないことになる。

一般的に言われる文明の前提を「農耕による食糧生産開始と、余剰農作物の生産」とすれば、1万1000年ほど前にオリエン特で起きた農耕が最初と考えられている。つまり2万年前に起こった氷河期が終わった頃である。つまり、前述の計算を当てはめれば、地球の年齢を1時間(60分)に置き換えてみ



昭和40年代、汚染され泡で覆われた多摩川



昭和30年代前半の神田川

プラスチックゴミが押し寄せる川岸



ると、ヒトの文明が起ってからまだ0.2秒ということになる。産業革命に至っては18世紀半ばから19世紀にかけて起こったことを考えると、その歴史は地球という惑星上の出来事としては絶望的なまでに短いのだ。

にもかかわらず、私たち人類は、特に産業革命以降、この青く美しい惑星に多大な負荷をかけ続けてきた。

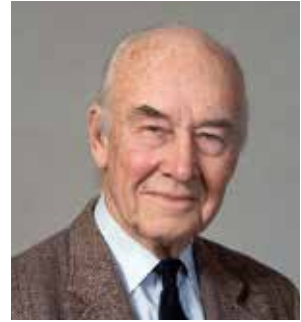
ことあるごとにそのことを叫び、そして「地球を救おう」と呼びかけているのはご承知の通りである。しかしよく考えてほしい。海洋汚染で海洋生物が絶滅しようが、森林伐採や温暖化で多くの地上生物が絶滅しようが、ましてヒトが自らの愚行によってこの地上から消え去ろうが、地球という惑星は宇宙に存在し続けるのだ。

地球という惑星にとっては、そんなことはたった2秒ほどの瞬時の出

来事に過ぎないのである。

環境問題とは、地球規模の大問題ではなく、氷河期以降に生まれた些細な「ヒト」という生物とそれを取り巻く動植物たちが生きるか死ぬかという、実に矮小なる事案なのである。

ウィルソンサイクルをご存じだろうか。カナダの地質学者、ツゾー・ウィルソン (John Tuzo Wilson) による提唱をきっかけに生まれた概念で、超大陸は3〜4億年の周期で離合集散を繰り返しているとされ、この理論から言えば、超大陸 (パンゲア) や、「ゴンドワナ大陸」は約6億年前に、「ロデينيا大陸」は約10億年前に誕生したと推定されている。そして超大陸 (パンゲア) 形成時には各大陸が衝突した際に形成された北米のアパラチア山脈や、現在進行形でアフリカ大陸がヨーロッパ



ウィルソン

パ大陸に衝突していく際に形成されているヨーロッパアルプス山脈、インド亜大陸がアジア大陸に衝突した際に形成されたヒマラヤ山脈などが形成された地形として考えられている。

つまり、6〜10億年のサイクルで地表は割れ、とても生物の棲める状態ではない事態になっているのだ。ヒトがエネルギーをどうしようが、汚染水をまき散らそうが、二酸化炭素を大量に放出しようが、プラ

スチックごみをばらまこうが、そんなことは地球という惑星にとつてはどうでもよいことなのである。

大上段に振りかぶって「環境問題」を声高に叫ぶ前に、こうした視点を忘れてはならない。「地球を救う」だの「温暖化」だの「大気汚染」などと騒ぐ前に、環境問題とは人類自身の存亡に係る由々しき事態なのであり、人類自身にかかる問題にすぎないのである。

本誌では、過去に何回か環境特集をお届けしてきた。そこで取り上げられてきたのは、人類が構築してきた「文明」の結果もたらされた、人間にとつて不都合な出来事の数々であった。

本特集においては、海洋汚染を含む水環境を「下水道」という視点から捉える視点、もう1つの海洋汚染に大きな影響を与えている「プラス

チックごみ」に着目する視点、さらには地球温暖化に係るテーマとして「自動車」とそれを取り巻く事象をとらえる視点の3つのテーマを掲げて取材・執筆をおこなっている。その根底にあるのは、人類自身の問題として存在する環境問題である。

本特集をどのように読み解き、どのように解釈し、どのように役立てるかには読者各位にお任せするが、環境問題というのは他人事ではなく人類自身の問題であり、そういった視点から見つめなおしておかないと、どうしても切実さのない「対岸の火事」的な考え方に陥りがちなのである。

太陽の寿命まであと50億年、次のウィルソンサイクルまで数億年、人類はどうやってそこまでの歴史を刻んでいけるのか。



下水道展



スイスイ下水道研究所



第二溜池幹線の工事現場



虹の下水道館



沼津上部イメージ図